



俺と私と僕と。



「話がある」

そうあいつに言われて俺は友人夫婦の家を訪れた。

俺たちは大学時代の同級生で、いつも3人でつるんでいた。

地方から上京してきて友達もいなかった俺に話しかけてくれたあいつ。

明るい笑顔でいつも場を和ませてくれた彼女。

彼女を好きだったかと聞かれれば、否定はしない。

だけでも、彼女はあいつを選んだ。俺もそれで本当に良かったと思った。

二人共俺の大切な友人だ。文句なしにお似合いだった。

あいつは一流企業に内定が決まって、数年後彼女と結婚。

俺はといえば可もなく不可もなく、毎日を「こんなもんか」と生きている。

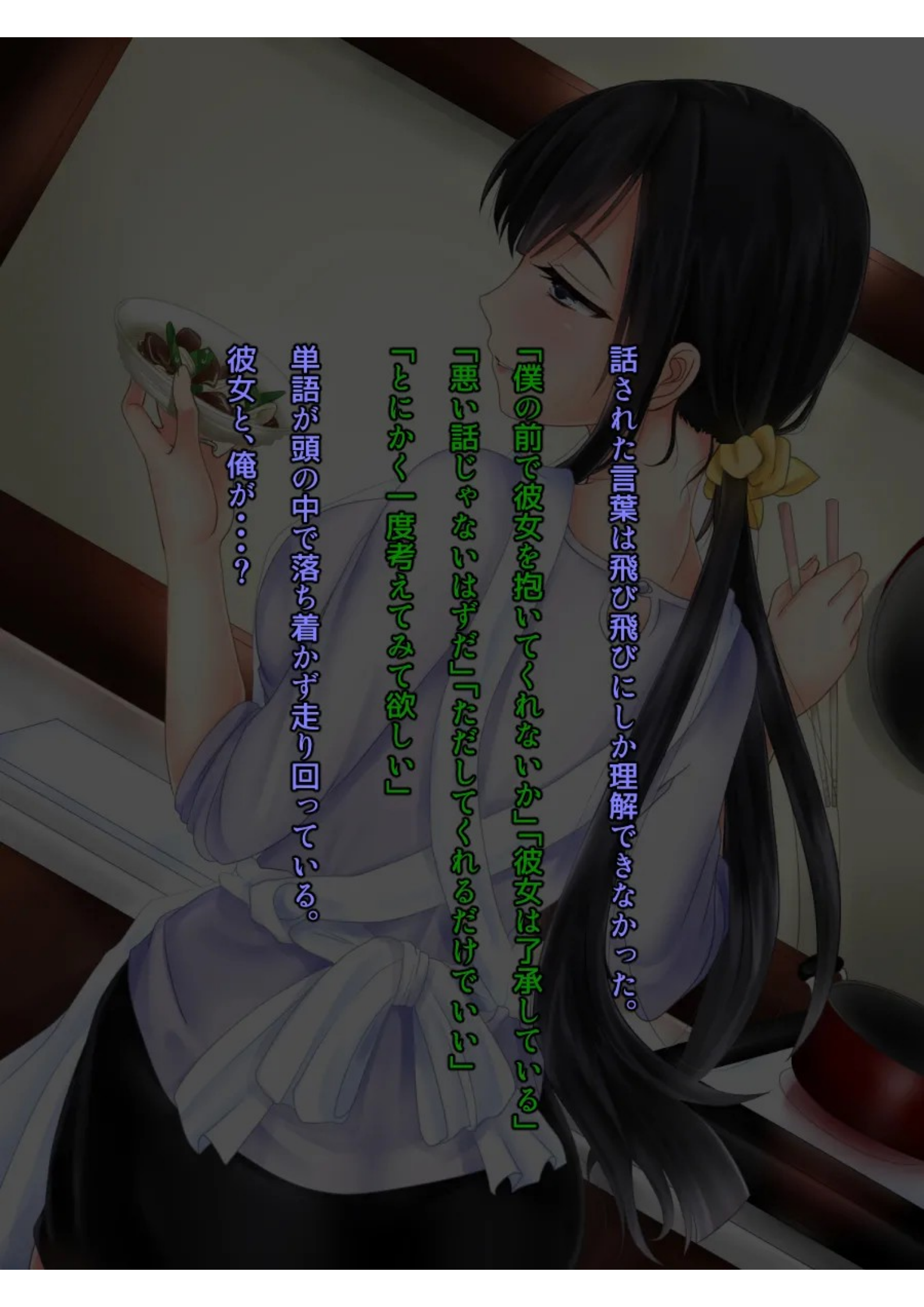
違う道を歩んでも、俺たちの交流が途絶えることはなかった。

改まった話。もしや吉報だろうかと思えることもなく気楽だった。

もし俺がこの話を聞く前に戻れるならば、果たしてどうするだろうか？

彼女がつまみを作り、台所へ立つと、
あいつは声を潜めて話した。





話された言葉は飛び飛びにしか理解できなかった。

「僕の前で彼女を抱いてくれないか」「彼女は了承している」

「悪い話じゃないはずだ」「ただしてくれるだけでいい」

「とにかく一度考えてみて欲しい」

単語が頭の中で落ち着かず走り回っている。

彼女と、俺が……？

彼女とあいつと、そのまま3人で飲んだはずなのに記憶が無い。
気付けば俺は自宅のベッドで目を覚ましていた。

本当に昨日2人の家に行ったのか？

できることならば、夢であって欲しかった。

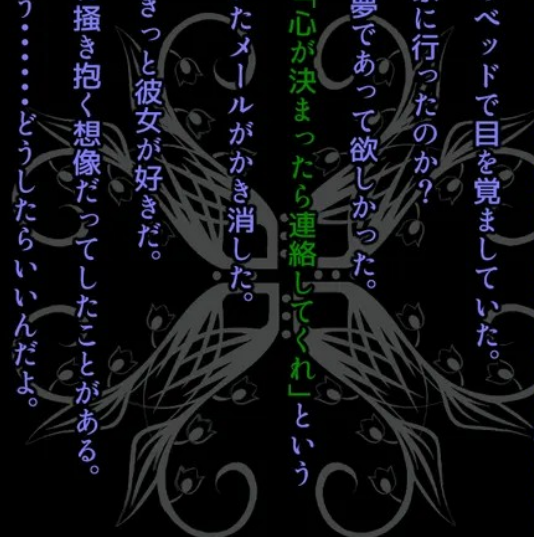
そんな淡い願いは、「心が決まったら連絡してくれ」という

あいつから届いていたメールがかき消した。

確かに、俺は今でもきつと彼女が好きだ。

昔は彼女をこの手に掻き抱く想像だっけしたことがある。

だけど…ちくしょう……どうしたらいいんだよ。



あれから半月が経った。
その間の俺は抜け殻のようだっただろう。
今日はここ最近よりもっとひどい有様で、
朝から何もする気が起きなかった。
夜になったら俺はこの体を引きずり、
あいつの家へ向かうんだ。



ギョッ...

俺を迎えたのは、あいつだった。

そして今までもこれからも入るわけがなかった部屋に通される。

2人の寝室。そこでは彼女が待っていた。

ベッドの上で、これから起きることを理解し俺を見つめている。





こうしてのこのこ来ておいて、「本当にいいの？」なんて聞けない。
彼女の手で外されていくその服のボタンはカウントダウンだった。

「お前からしてあげなさい」

なかなか手を伸ばそうとしない俺を見てか、
この喜劇を取り仕切る監督であるあいつが一言放った。

その言葉を合図に、彼女の手が俺にかかる。
カチャリ、カチャリという小さな金属音がやけに耳に響いた。
自分の立ち位置をまだ理解していない俺のモノは、
彼女の眼前に放り出されてなお萎縮をしている。





小さな口が俺の先端をとらえる。
温かい口内で舌先が微かに亀頭を舐め上げた。
軽く感電したらこんな感じなのだろうか。
ピリリとした刺激が体を駆ける。



彼女が自分のモノを舐めている。
その口は先端を弄ぶだけでは留まらず、
全体を扱くように飲む込んでいく。
目眩がしそうな光景だった。



さゆぽん、と言がしそうなほどに彼女から弾け出た俺自身は、
さっきの萎縮はどっへやらすっかり出来上がっていた。
俺の体は、俺の心よりも潔いのかもしれない。
俺は両肩を彼女に押されるがまま、柔らかいベッドに横たわる。

重力に抗い反り立つ俺の先端が、少しずつ彼女を割いていく。

「…はぁっ」

彼女の口から吐息が漏れた。

はぁ…

あ…
す…

はぁ…

ぬち…

はぁ…

ぬち…

大きな抵抗もなく、俺は順調に飲み込まれていく。

あいつはどんな顔をしてこの行為を見ているのか。

俺はそれを見る気にはならなかった。

ただ、初めて触れた彼女の内部は、温かく心地良い。



徐々に、徐々に腰の動きは激しさを増していく。
俺を絞め殺そうとしているのではないかとどうやら思っている。
彼女の膣壁は蠢きこぼれ出す精を貪っていく。
俺の上で彼女が声を上げ、乱れている。
これは本当に、現実なのだろうか。

が、んあ、んあ、はあ、

あ、あ、あ、

ぬほっ♡おっ

んあ、んあ、んあ、

ギシッ

ギシッ



この状況が現実だと知らせるのは快感だった。

肉体は限界寸前まで追いやられている。

それに気付いているであろう彼女は一向に動きを緩めない。

「...大丈夫、だから...」のまっつ...

彼女はその言葉と共に深く腰を下ろし俺を咥え込む。

抜くこともせずそのまま彼女を組み敷き、体を押さえつける。
足を抱え上げ押しつぶすように抜き挿しを繰り返せば、
彼女の中からは2人分の体液が溢れ出す。
糞は投げられたんだ。もう、俺を隠すこともない。

は！

はぁ♡ん♡び♡
は！



吐息が交じるくらいの距離に彼女がいる。
俺の体に悶え、悲鳴のような喘ぎ声を上げている。
夢のようだった。たまらなかった。

叩きつけるように腰を振り、体がぶつかり合う卑猥な音を聞く。

はっ
わっ
はっ
わっ
はっ
わっ
はっ
わっ

そうだ、彼女が大丈夫だって言ったんだ。

この行為も、この気持ちも。大丈夫、何も問題ない。

びん...

びん...

ほっ♡

ほっ♡

ああ♡
ああ♡
はみ♡

びん♡

こみ上げる射精感を見、何度も愛しい彼女をえぐる。

何年も積み積もったものは突如快感とともに弾け、

このままもう止まらないのではと思うへらへら

俺の先端から彼女の奥へと放出されていった。

びん♡

せゅる...
とび♡



どうかしているとされるかもしれない。

僕も最初は自分を疑った。

愛しているはずの妻を抱いても、どこか満たされない。

どこか夫婦として不完全燃焼だった僕たち。

そして僕はある答えへとたどり着いた。

――妻が誰かに汚されているところを見たい。

僕しか男を知らない妻が、僕以外で乱れ狂う姿。

その妄想は次第に妄執となり脳を蝕んだ。

妻への提案は賭けだった。

僕は僕のために、親友を利用する。

妻が首を縦に振ったのは、果たして幸だったのだろうか。





貞淑だった妻は今まるで交尾をする雌犬のように
後ろから友人に突かれている。

最初の目こそどこか体に緊張があったものの、
何度も抱かれる内に解れたのか。

今では純粋な快楽に身を委ねている。

はあ♡
あ♡♡

は！

はっ

ふん♡

ふん♡

ふん♡

ふん♡

ふん♡

僕はあの目から、味わったことの無い昂ぶりを感じている。

隠していた気持ちを激しく行為にぶつける友人。

本当に感謝している。

おかげで僕は、淫らに喘ぐ妻をこうして見てられる。



まー

その声が届いたのかどうなのか。

友人は僕に見えるように彼女の体を抱え上げる。

罪悪感があるのかどこか遠慮がらだった最初の交わりから何度か回数を重ね、

友人は「分かって」くれたのかもしれない。





まるで自慰のための道具のように妻の体が上下に揺れる。
露わになった結合部からは交わりの証が漏れていく。
僕たちの関係は不可解かもしれない。だけれどもどうだ。
夫ではない男に汚されている彼女は、こんなにも綺麗じゃないか。

両腕を引かれ立たされた妻は、間髪入れず穿たれる。

ほんの僅かに残った羞恥心を捨て去るように、僕のすぐ前ではしたなく口を開き喘いでいる。

そんな妻から、僕は目が離せなかった。

んっ

ひん

見ているだけのつもりだった。だけれども何故だろう。

ごくごく自然に僕は、妻の唇へ自身の唇を重ねていた。

舌を絡ませ中に満たされた唾液を味わう。



んっ♡
ふっ♡

ちゅっ♡

ちゅっ♡

おっ♡

おっ♡

ちゅっ♡

ちゅっ♡

おん♡

おん♡

別の刺激が加わったことで具合が変わったのか、誘われるように友人は妻の中で達していく。

あゝいっ♡♡♡♡♡

びゅん♡

ぜゅん♡♡♡♡♡

あ...

あ...

あみみ♡♡

びゅん♡

ぜゅん♡♡♡♡♡

それに合わせ、妻の体も小刻みに跳ねた。交わりの終わりを告げる独特な空気の中、熱を帯びた妻の瞳は静かに何かを見ていた。

この行為に私は、
何を思っていただろう。
何を感じていただろう。
かつて友人であった2人の前で、
私はハダカになっていく。



夫のソレとはまた違ったあの人のモノは、

こうして夫の前で行爲に及ぶのは、もう何度目だろう。





私の芯に、熱を帯びたあの人の息がかかる。
それだけでもこえはゆくてどことなく感じてしまうのだ。
その舌先は時折その芯を突き揺らした。
鋭い快感が、理性を溶かしていく。



いつしか私は夢中になって頭を振っていた。

こぼ、こぼと、えづくはしたない音が口から漏れ出る。

あの人が私を求めているのが分かるから、

苦しいなんて思わなかった。

ずきん♡

ずきん♡

ずきん♡

ふー♡

ふー♡

あは♡

あは♡

あは♡

あは♡

あは♡

そうするのが当たり前であるかのように私は、

それでも変わらず大きいままのソレは、

11

ちゅーぽん

11/30



あの人が入ってきて中が押し広げられる。
角度がついた動きは、
いつもと違う場所を削るように刺激する。
あの人が動く度に私は、
小刻みに震え声を上げた。

ぬるる...

みずみず...

ぽろぽろ...

んんん

あ...あ...

ああ...ああ...



そんな私の反応を見てか、
あの人は執拗にそこを攻める。
私はそれを受け止めるのがやっとで、
気付けば太ももは中から漏れた水で
じっとり濡れていた。

ふんふん
くっく

ふんふん
ふんふん

ふんふん

ふんふん

ふん

ぬちゅ
ぬちゅ
ぬちゅ

ぬちゅ
ぬちゅ

ぬちゅ
ぬちゅ



はぁ～

がわ

うん

はぁ～

はぁ～

がわ

どれだけ声を上げても

私を貪る動きは止まることなく

激しい痙攣が訪れ私は自分が何度も達していることを知る。

その度に思考は白く塗りつぶされ、

私は快感の波に溺れきっていた。

がわ

ふー

はぁ

ふー

はぁ～
はぁ～
はぁ～



奥に注ぎ込まれる感覚が、
薄れかけた意識をつなぎとめる。
ああ、この瞬間はいつもこうだ。
あなたはとても辛そうで...
だけどとても愛おしいから私を見つめてくれる。

昔から、ずっと変わらない。

私が夫のものになっていくのを、ただ見ていた。

悔しがらなくてもなく、嫌がるでもなく、喜んでくれた。

きっと本当は違うのに。

今も昔も、優しいままの人。

だから...

るぽ♡

はあ...

あ...

ギシ...





わざと避けていてくれた口付けを、あなたに。
つながった唇と舌からは、
眠らせられていた気持ちが流れ込んでくる。
とても歪なこれが、きっとあなたとの形。

あまのこ♡

きゅん♡

ふに♡

ふに♡

そして、私の旦那様。

あなたの愛も歪曲しているかもしれない。

だけれども私は、そんなあなたの心すらも嬉しかった。

私はこの行為の中で初めてその目を見つめ、手を伸ばす。

「あなた、来て…」



あはっ…♡♡

むっ♡

むっ♡

うわっ♡

すっ♡

熱に挟まれ、熱に溺れていく。

2対の手は私を弄り、抱え、撫で、揉みしだいた。

私の全身はされるがままに2人を受け入れ、

身体的な快楽と精神的な充足感が私を包む。

ズパ♡

ガッ♡

チガ♡

はー！♡



びんぽ♡



セ
ユ
ッ
♡

セニョール

A close-up of a hand with red, stylized Japanese sound effects 'ドッ' and 'ヒュー' overlaid on it. The hand is shown from the side, with fingers slightly curled. The background is a soft, warm pinkish-orange gradient. The sound effects are written in a bold, bubbly font with white outlines.

カキュウ...

2人は2人の思うがままに、私を愛していく。
中も外も、私の全ては2人に埋め尽くされる。

私は2人分の精をこの身に受けながら、

私たちの新しい形が出来上がっていくのを感じていた。



はあ...♡

はあ♡

はあ...♡

はあ...♡

どれだけの時が経ったのだろう。

何もかもを忘れてしまうほど長い間、私たちは交わっていた。

夜はまもなく終わる。

私は一人横たわり、熱いものが私の中から流れ出していくのを感じていた。



すず...

ふふ...

ふふ...

ズオ...

んっ...

息を整えようと目を閉じると、疲労感が身体を脱力させていく。

ああ、いい気分...

いい気持ちを抱ったまま眠りこけるのも、いいかもしれない。

俺は夢の中で彼女を見ていた。

いや、夢じゃなくて記憶なのかもしれない。

彼女があいつに思いを告げられたであろう日。

「できることなら、ずっと三人でいられればいいのにね」

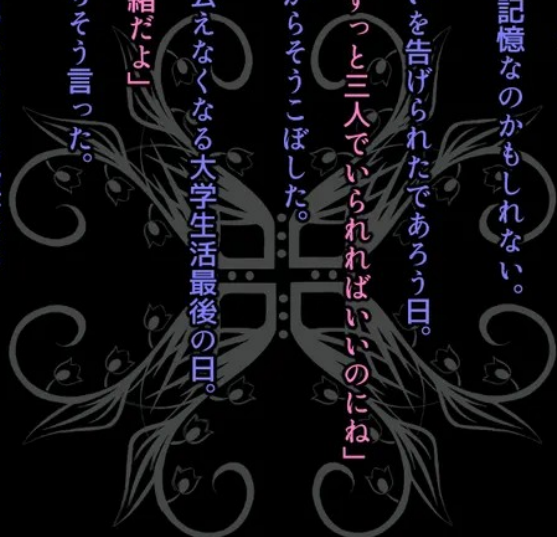
彼女は夕日を見ながらそうこぼした。

今までのようには会えなくなる大学生活最後の日。

「ずっと、ずっと一緒だよ」

彼女は微笑みながらそう言った。

そうだ、これは俺が見たあの日の彼女だ。





俺はあの時と変わらず彼女を見ている。
俺も、彼女も、あいつも、この舞台から降りることはなかった。
彼女の腹が膨れたとしても、終わりは訪れない。
このままどこまでも沈み、溺れていくんだろう。

あーっ♡

あーっ♡

あーっ♡

あーっ♡

あーっ♡
あーっ♡
あーっ♡

ズッ...

ズッ...



「ねえ、これで本当に、私たちずっと一緒だね」



彼女は、今まで見たことがないくらい幸せそうに笑っていた。
そうだ、きつと、これで良かったんだ。
今回も、これからも。
俺たちは……

ぬほ…
ぬほ…

ヌグ…

ズク…































はぁ...

はぁ...
はぁ...

はぁ...

はぁ...
はぁ...

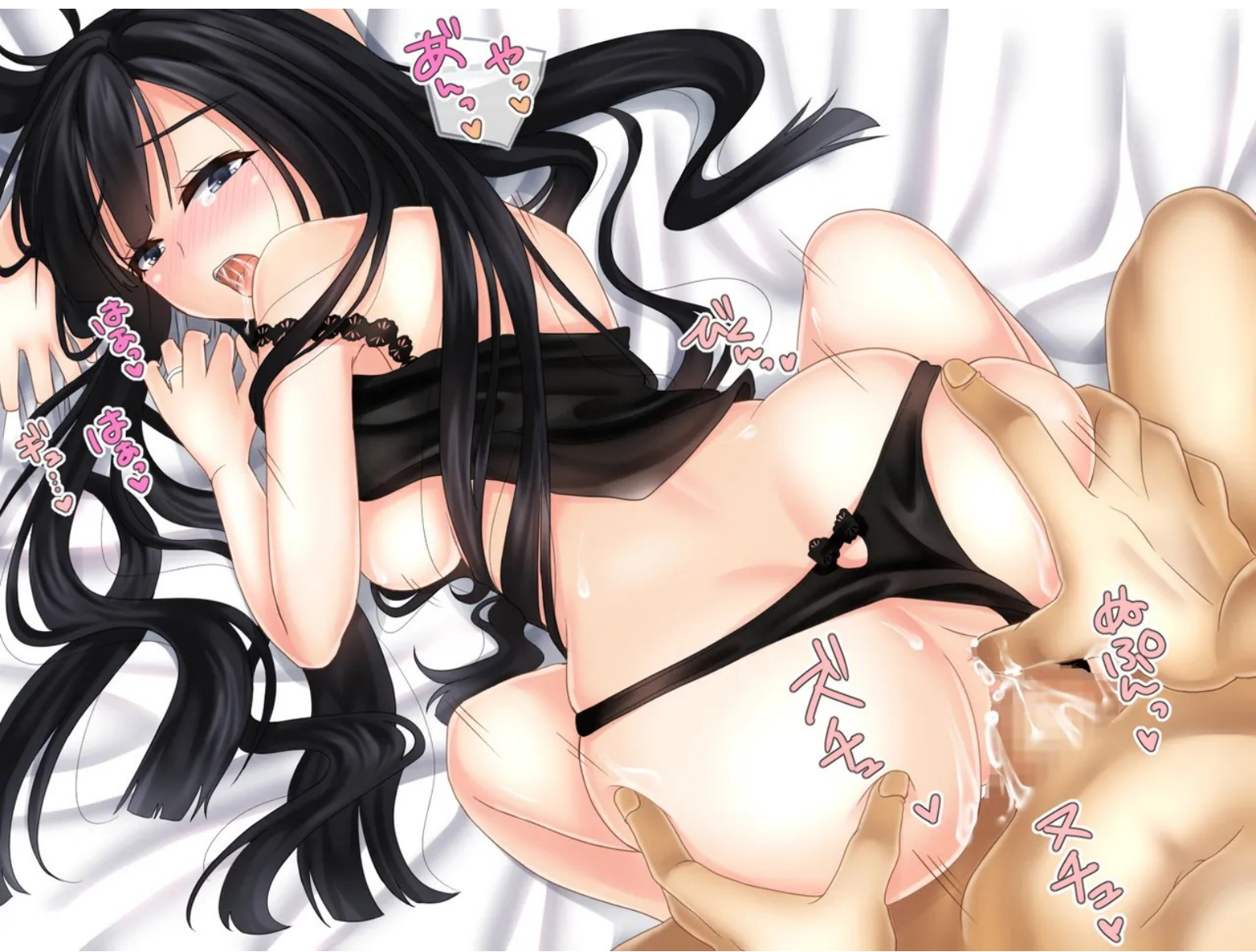
はぁ♡

はぁ♡

はぁ♡
はぁ♡

ああ♡
ああ♡
はぁ♡













































あぁ...♡
ふぁ...♡
はー♡

は♡

は♡

は♡

は♡

は♡

は♡

は♡

は♡

























































































